

人生は人として生まれるから人生ありと空海大師様はおっしゃいました。そこで問題になるのが六道の上から二番目に存在する人間として一生を終ることが出来るか否かです。善根功德を積むこと浅く、罪を重ねること深し、それは自己に甘く、罪の認識は浅いからです。北原白秋も 風吹けば吹くがまま、我はただ揺られ揺られつ、揺られつ、その風をまた、我がうしろ遙かにおくる」と言った。人生には大きな転機が度々訪れます。吉川英治師も 転機は、その岐路迷いを、いかに勇氣と賢明をもつて選り、その階梯を、どう踏み登って来たにせよ、それは、投げられた運命に動かされたにすぎない。自己は従である。」と又、こうも言っている。自分がつくった転機は、自分が試されたものだった」と。天運が我れに味方する時であれば、機運敗れる時もある、挫けずに運氣が上昇するまで辛抱すべし。人生この世の中で嘘・伴りがきかない真の現象は生まれたら必ず死ぬということです。赤で生まれ白装束で送られる訳です。我々は清淨無垢な赤子から、成長するに従って、内面外面に垢が積もっていきます。すぐ取れる垢もあれば、落ちない垢も身に付けてしまいます。祇園精舎の鐘の音で始まる平家物語の行状を忘れてはならないと思います。損だ・得だ・楽だ・苦だ・嫌だ・好きだと、好き勝手な行動が埃まみれの中に身を置く事になり、真髓を見失うこととなります。身を飾り、贅沢をすれば、我が身を重くし、心痛深くなり、心配の種が増えるのみです。教えに 愚か者よ、自分を自分で担いで歩こうというのか」と身の丈に合った、程々で十分です。信仰は損得の得でなく、人徳の徳を求めて行動してほしと思えます。二宮尊徳も 何事も事足りすぎて事足らず徳に報いる道の見えねば」と。良いで止め、もっと良くは望まぬことです。

例えば商売繁盛の祈願をすると思します。欲望の度合いにもよると思しますし、なにはさておき第一に、人間は心身の健康です。健康に感謝した後に、日々の生活が不自由なく過ごせるだけの利益を、お願いして頂くと言うことです。樂をするための金を得ようとするれば佛は力添えをしてくれないと思えます。思う様な御利益は頂けません。世の中 金」で解決出来ないことがあるから面白いのであって、人生全て金でことが収まってしまうのであれば、ますます 金」に目がくらみ、金の病を拾い、善悪の見境も無くなり、物騒な社会に成ってしまうと、思われます。人間は浅はかなもので病気に成って初めて健康の大切さを学ぶ、健脚であったかたが、足が思うようにならず、歩けなくなるとはじめて、足のありがたみが分かるようなものです。友達がいなく成って友の大切さを学び、両親がいなく成って親のありがたみが解り、というように身に痛みを感じるまで感謝する事なく忘却しているのです。世の人に欲を捨てよと教へつつ、あとより拾う寺の住職」も、いるかも。そうならないようにクワバラクワバラ。

秋田長持唄に さあさお立ちだ お名残おしや 今度ナー来る時孫つれて・・・故郷恋しと想うな娘故郷当座の仮の宿」。良いか悪いか判断は夫々ですが現在結婚する年齢が上がってきました。親鸞聖人も四十歳で九条兼実の娘と結婚し、七人の子を授かりました。親鸞は九十歳まで子供を育てながら布教に精進されました。しかしながら、サラリーマンは定年が過ぎます。子供の成長に合わせて金銭の負担も増えるわけです。生活設計も含めて逆算し結婚したほうが良いかも。少子化は大きな問題です。